

辺野古通信

第24号 2011年10月24日



辺野古のフェンスを飾る横断幕。米兵が取り外しても（左）、すぐに復活！（右）

発行 沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座
沖縄講座 HP <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/>

懲りない面々の沖縄「説得」活動を許すな！

■新旧閣僚の訪沖が続いている。野田首相の年内訪沖も取り沙汰される。名護の辺野古移設推進派との密談、新たな振興策——一括交付金をちらつかせての、県知事や名護市長へのあからさまな恫喝。辺野古アセス評価書の年内提出も通告された。■ますます露わになった民主党政権の沖縄政策の本質。6月21日、日米安全保障協議委員会（2プラス2）「辺野古V字案」で「合意」（同時に2014年移設期限は先送り。「県外移設」を求める沖縄の揺ぎ無い民意と米議会の国防費削減圧力に晒され漂流しつつある米軍再編の行方を暗示する）。9月に訪米した仲井真知事が「普天間は県外か国外しかない」と訴えた、その数日後、野田新首相はオバマ大統領から「早く普天間問題の結果を出して」と迫られ「沖縄を説得します」と誓いを立てた。「説得」すべきは米国ではないか！「いったいどこの国の総理大臣か！」（9/25 横須賀集会での沖縄平和運動センター・山城さんの発言）バネッタ国防長官も来日予定。米議会の国防費削減圧力もあり、オバマ政権にも焦りがみえる。■10月3日、与那国島への陸自配備を止めようと政府要請行動に上京した二人の与那国町議のお話を聞く機会があった。八重山地区の教科書選択への文科省の介入もあり、「新たな沖縄処分ではないか」と怒りの声が渦巻いている。（2

頁）■7月1日から米軍ヘリパッド建設作業が始まる！東村・高江からの呼びかけに応じて、6月30日から数日間、座り込みに参加した。建設予定地に通じる各ゲートの監視テントには沖縄内外から数十名が詰め掛け、工事作業車の進入を阻むように平和団体や政党の宣伝カーでバリエード。「ヘリパッド建設を許さない！」という人々の硬い意思の前に、その後数ヶ月間経過するも沖縄防衛局は手が出せない。（3頁）■欠陥だらけの「最新鋭ヘリ」オスプレイの沖縄配備計画がようやく公式表明された。米軍資料からは明らかになっていたものの、沖縄の反発を怖れた日本政府が公式に認めようとしなかった。高江を抱える東村村長もオスプレイ配備には反対を表明。県議会でも抗議決議が採択された。（3頁）■9/10-12に県央共闘の第9次訪韓団に参加し、「韓国の辺野古」といわれる済州島・江汀村の海軍基地建設反対運動の現場を訪問。その後も緊迫した状況が続く。「日本人も海軍基地問題の当事者です」という発言が印象に残る。（4頁）■来年は「復帰」=再併合40年。現地の粘り強い抵抗闘争に呼応するヤマトの闘いが求められている。沖縄講座も次の行動を準備中です！
■辺野古・高江カンパは累計1,229,905円（10月24日現在）。引き続きカンパを！
郵振 00210-0-2021 沖縄連続講座

ピース・フェスティバル in 大和・綾瀬 2011へ

10月29日(土)10時 大和駅東側広場にて

ピースコンサート(無料)・朴保バンド・カテリーナ・寿・打鼓音ほか
模擬店コーナー・沖縄物産・低農薬野菜・焼き鳥・おでん・etc
写真パネル展・「沖縄・普天間・辺野古」ほか

八重山への陸上自衛隊配備—軍事要塞化にNO!

10月3日、水道橋の全水道会館で沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック主催の「与那国島への自衛隊派兵を許さない緊急集会」が開かれた。約100人が集まり会場は満席(写真)。

与那国町会議員の田里千代基さん、崎元俊男さんが怒りの現地報告

崎元さんは、住民説明会も開かず、わずか6名の町議会で誘致決議を強行し独断専行する外間守吉町長を鋭く批判した。2008年の誘致要請決議の時には与那国町民514人の署名が集められたが、今回の誘致決議撤回要請決議の署名には566人の町民が署名。3年前の514人の中から20数名が撤回要請署名に加わったとか。世論調査でも73%の町民が反対。民意は明らかなのに、9月22日に2人が提出した誘致要請撤回決議は町議会で否決。「わずか1600人の島民が賛成反対で分断されるのがたまらない」と崎元さん。

田里さんは自衛隊誘致が与那国島の地域振興にはつながらないことを、陸海空自衛隊を誘致しても大幅に人口を減らしている対馬の例を挙げて指摘。むしろ国境の緊張を高めることで、与那国島がこれまで進めてきた台湾との民間交流を軸とした「自立自治共生の島づくり」の障害になることを強調した。

陸上自衛隊の南西諸島配備を軸とした島嶼防衛体制の構築は、昨年末の中期防衛力整備計画に「南西地域の島嶼部に陸自の沿岸監視部隊を配置する」と明記された。本年6月21日の日米安保協(2プラス2)では、東日本大震災の経験を教訓に「南西諸島を災害救援のためのロジスティックハブ(国際物流拠点)として整備する方針」が打ち出され、北沢防衛相(当時)は「震災を一つの契機にして、南西諸島に災害対応の国際的なものを作る」「無人機やロボットの訓練基地を整備し、日本だけでなく東南アジア諸国連合諸国にも開放したい」と発言。

8月5日、新たな防衛計画の大綱で掲げた「動的防衛力」の具体化に向けた構造改革推進委員会の報告書が公表され、そこでは重点地域に首都圏と南西地域を指定し、緊急事態の南西諸島への部隊展開では民間と米軍の輸送力活用を明記。平素から島嶼部に実戦部隊を置き、全国から応援を受け入れる拠点づく



りを重視。日米韓3カ国の共同訓練を検討。南西地域での訓練場整備や米軍施設の共同使用拡大で充実化を目指すこととされ、また「与那国島南西部の町有地を取得し駐屯地を建設する方針を固めた」(8/21沖タイ)とされている。さらに9月30日に発表された防衛省の概算要求に与那国島への陸自配備予算15億円が盛り込まれ、地元の声を無視して南西諸島への陸自配備が強行されようとしている。

八重山地区中学校教科書選定を巡り介入を強める文科省

この陸自配備問題と並んでもうひとつの注目すべき動きは、八重山地区の中学校教科書選定問題。石垣、竹富、与那国の教育長らで構成する「教科用図書八重山採択地区協議会」の玉津博克会長(石垣市教育長)がこれまでの選定ルールを突然、変えたのが発端。現場教員の意向が無視され、教育長らでつくる協議会の権限が強められ、結果として協議会メンバー8人の無記名投票で「新しい歴史教科書をつくる会」系の育鵬社版教科書「新しいみんなの公民」が採択されたが、3市町で協議会決定に疑問の声が噴出、9月8日、3市町の13人の教育委員全員が集まり、公民教科書として東京書籍版を賛成多数で採択した。

ここから、自民党が介入し巻き返しが始まる。9月13日には中川文科相が9月8日の全教育委員による決定は無効との見解を示し、15日には沖縄県教育長に八重山3市町への「指導」を求める局長名の通知を出すに至る。

この経緯は、4年前の高校教科書の沖縄戦の記述を巡る教科書検定問題を想起させる。

陸上自衛隊の八重山配備と教科書採択問題は、野田新政権の沖縄政策の本質を露にする。自衛隊進駐—八重山の軍事要塞化を許すな!



来年から普天間のヘリ部隊の後継機として配備が予定されるオスプレイは、米軍の中では「未亡人製造機」と揶揄される。1992年から墜落事故が相次ぎ、34人が死亡している。昨年4月アフガニスタンでも墜落し、兵士3人、民間人1人が犠牲になった。この危険な「最新鋭ヘリ」が普天間で、辺野古で、高江で飛び回る姿を想像するだけで怖ろしい。高江ヘリパッド建設を容認していた東村村長も、「オスプレイ反対」を明言。県議会でも抗議決議を挙げた。日米両政府は沖縄の声に耳傾けよ！

普天間飛行場へのオスプレイ配備計画に反対する抗議決議

去る6月6日、米国防総省は、海兵隊次期主力輸送機として垂直離着陸機MV22 オスプレイを2012年10月に普天間飛行場に配備すると正式に発表した。

オスプレイは、開発段階での試験飛行や実戦配備後に墜落等を繰り返し、多数の犠牲者を出しているにもかかわらず、米側は同機の配備についてCH46より静かで、安全性が高いと優位性のみを強調している。しかしながら、離着陸時の最大騒音はCH46を上回り、日常的に離着陸が繰り返される基地周辺では現状より騒音被害が増加することは明らかである。

さらに、オスプレイが普天間飛行場に配備された場合、同飛行場周辺や演習場のある本島北部地域では訓練マニュアル習熟のための飛行が激化する可能性があることから、隣接する小学校や周辺住民からは騒音問題、環境問題等に対する不安や怒りと墜落への恐怖の声が上がっている。

また、日本政府は、人命にかかわる重大な問題であるオスプレイ配備計画について、沖縄県や関係自治体への伝達を口頭で行うばかりか、米国では実施されているアセスメントが普天間飛行場で実施されるかどうかについては明らかにせず、配備中のヘリコプターにかわる単なる機種変更と位置づけるなど、県民の生命と人権を無視した対応は言語道断で到底容認できるものではない。

世界一危険で欠陥だらけの普天間飛行場にオスプレイを配備することにより、既成事実を積み上げ、一方的に押しつけようとする日米両政府のやり方は、県民が強く望んでいる「一日も早い危険性の除去」に逆行するものであり、断じて許されるものではない。

よって、本県議会は、県民の生命、安全及び生活環境を守る立場から、普天間飛行場へのMV22オスプレイ配備計画の撤回を強く要求する。

上記のとおり決議する。

平成23年7月14日

沖 縄 県 議 会

駐日米国大使・在日米軍司令官・在日米軍沖縄地域調整官・在沖米国総領事 あて

ノグチゲラの繁殖期が終えた7月から工事を始めるとしていた沖縄防衛局だが、7月1日の朝から、東村・高江のN4,N1ゲート前は静けさに包まれていた。蝉と野鳥の鳴き声がするなか、イノシシがテント前をゆっくりと横切り、小さな生き物たちが森の中で蠢く。小さな集落の粘り強い住民の闘いは、沖縄内外に共感の輪を広げ、座り込みテントを訪れる人があとを絶たない。ゲート前には政党と平和運動団体の宣伝カーが横付けされ工事車両を阻む。夜は満天の星空。森の暗闇に足を踏み込むと、虫が乱舞して、星空との境界をあいまいにする。そんな静寂を、米軍ヘリの爆音が切り裂く。時計を見ると夜の9時を回っていた。(10月21日現在、防衛局の動きは見られない。)

高江オスプレイパッド建設NO!



「韓国の辺野古」 済州島カンジョン村の人々と交流

～県央共闘第9次訪韓団に参加して～



基地撤去をめざす県央共闘会議の第9次訪韓団の一員として韓国・済州島、「韓国の辺野古」と称されるカンジョン村を訪問し、軍事基地建設を拒否して闘うカンジョン江汀村の人々と交流した。以下、簡単に報告する。

2011年9月10日(土)

済州チェジュ空港から南下、最初の訪問地・西帰浦ソギボ市カンジョン村に向かう。あいにくの曇り空。江汀村に入ると、海軍基地反対を示す黄色い幟を掲げた建物が通りの両側に並ぶ。11日からの盆休みの直前で大きな動きはなかったが、この時点までの海軍基地建設を巡る状況は、大変緊迫していた。

【9/10までの動きの概要】

4年半にわたる村民の頑強な抵抗に業を煮やしたイ・ミョンパク政権は、あくまで「2014年完成」にこだわり、警察権力をも投入し、工事を強行してきた。村民と支援者は、ショベルカーやクレーン車の前に横たわり、海岸にテントを張り、体を鎖につないで座り込み、櫓に立てこもり、ありとあらゆる抵抗運動を展開した。8月31日、裁判所は中心メンバー200名以上に「予定地への立入禁止の仮処分」決定を通知する看板を設置。強硬策の頂点が、韓国本土からの600人に上る戦闘警察の投入と、9月2日から3日にかけての建設予定地からの反対派の強制排除、30名以上にわたる中心メンバーの不当逮捕。予定地の海岸にはフェンスが張り巡らされ、反対運動の拠点にはフェンスの外側に押し出された。カン・ドンギョン村長も、8月24日に不当逮捕され拘束されたままだ。



14時過ぎ、公民館到着。副会長（副村長）のコ・グァンチョルさんと対策委員長のコ・グォンルさんが出迎え。村長が不当逮捕された今、コ・グァンチョルさんが反対闘争のリーダー。ささやかな支援カンパと神奈川から持参した反基地運動等の資料を渡した。館内でコ・グァンチョルさんがにこやかに。「世界的にも基地は遺物であり、必要のないもの。いまこそ各

地の反基地運動が連帯して、東アジアの平和のために闘おう」と力強い歓迎の挨拶。コ・グォンルさんから闘争の現状報告。彼は建設予定地内に建てた櫓の上に鎖で体を縛り付けて座込んでいた。疲れも見えるが日焼けして精悍な顔つき。「やり方を見ていると、韓国政府の背後に米軍の圧力があるのではないかと。米軍はアジアに基地を拡充することで中国との緊張を高め、そのことにより自国の軍需産業の利益を図ろうとしている。東北アジアの平和のためにも、東北アジアの市民の連帯が必要」と強調、「日本も中国も、私たちと同じようにこの海軍基地問題の当事者」の言葉が印象に残った。

支援のコ・ギチョンさんの案内で、1週間前に激突した現場に向かう。海岸に通じる道路は戦闘警察が阻止線を張って車両通行止め。バスから降り横断幕で飾られた道路を抜けていくと、建設予定地は高さ2mほどのフェンスで囲われて海岸には出られない。コンテナの中から民主労働党の済州道委員長（前国会議員）のヒョン・エジャさん出てきてご挨拶。7月から座込み、籠城している。反対派住民のテントやテーブルが並び、コ・グォンルさんが立て籠もった櫓も。200人ほどが座込み、体を縛り付けていた鎖がいくつも残されていた。予定地内の海岸にある、溶岩が固まってできたというクロムビ岩（淡水が湧き、カンジョンにしかないという希少生物も生息する）が重機で砕かれるのが「身を傷つけられるようで辛い」と言う。

フェンスで遮られていた海岸を見るために、東側に大回りして漁港から突き出した堤に行くと、建設予定地のクロムビ岩が遠くに見えた。盆休みを控え動きはない。住民が座り込んでいた海岸のテントはそのまま残されている。

予定地の西側に回り、警察が厳重に警備する建設事業団の建物入口の脇を通過して、江汀川沿いの緑豊かな小道を進むと海岸に出た。丘の上にフェンスに囲まれた建設事業団の建物。警備員がこちらを監視していた。強風と波で、予定海域を囲んでいた支柱と鉄条網が岩場に打ち上げられていた。「こんな波の強い海に基地を作ろうなんて無理」とコ・ギチョンさんは笑う。

日が暮れてきたところで、雨が激しく降り出した。村内の店で地元の海で採れた魚介類の鍋を囲んでコ・グァンチョルさんらと意見交流。「これから済州島全体、韓国本土にも訴え、世論を喚起する準備を進めていく」と語る表情には、勝利への確信と決意が感じられた。（現地ではその後も緊迫した状況が続いている）